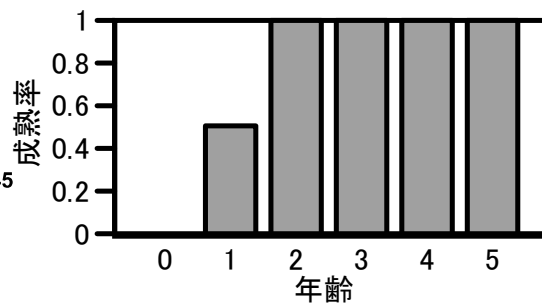
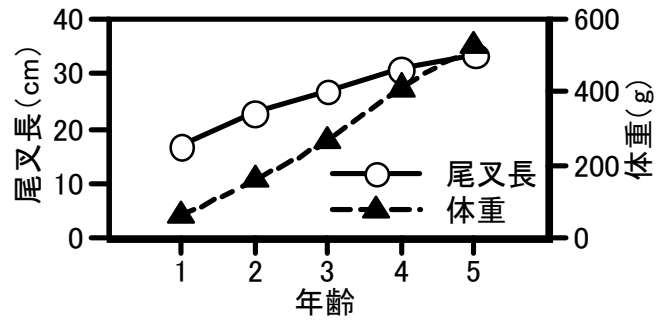
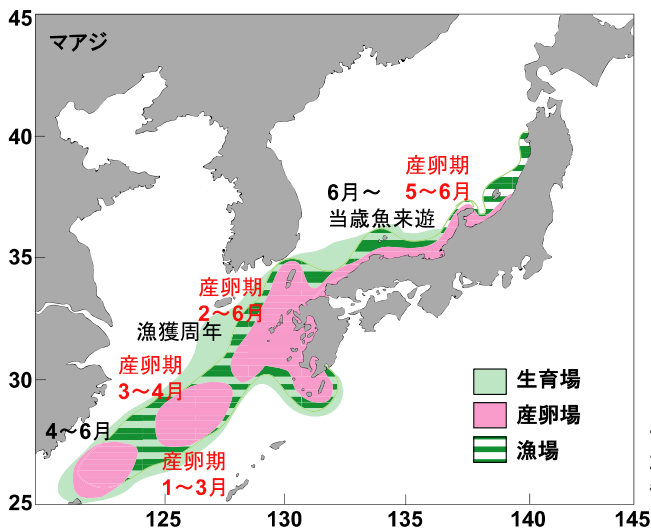




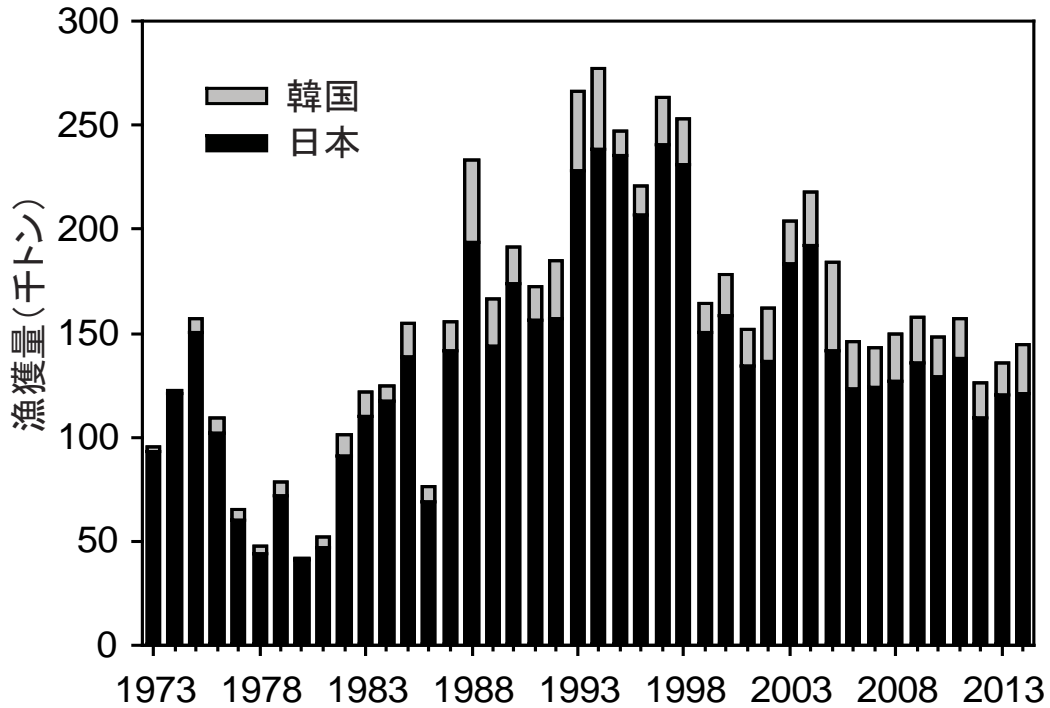
マアジ対馬暖流系群 平成27年度資源評価結果

分布・成長・成熟



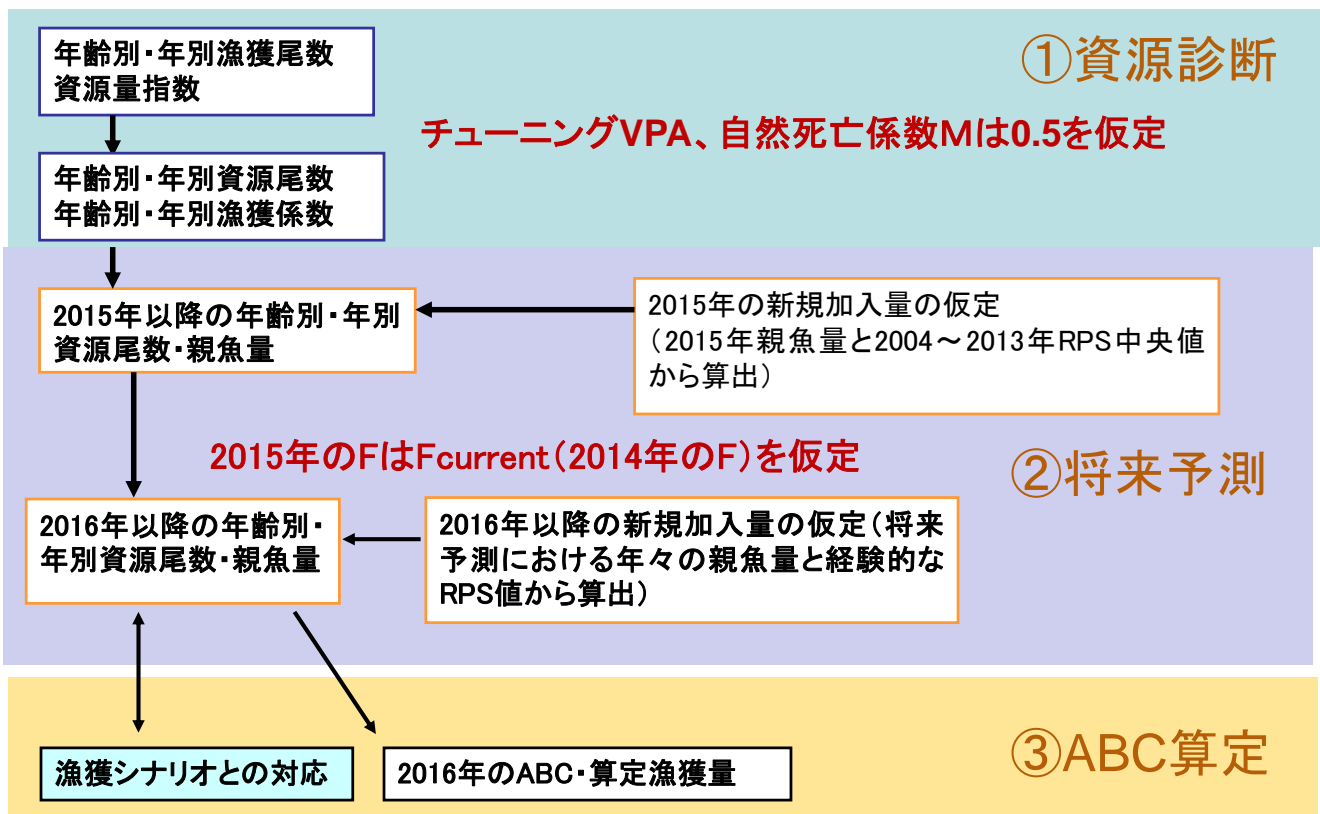
- 1歳で尾叉長16~18cm、2歳で22~24cm、3歳で26~28cm。
- 1歳で50%程度、2歳でほぼ全ての個体が成熟する。

漁獲量の推移

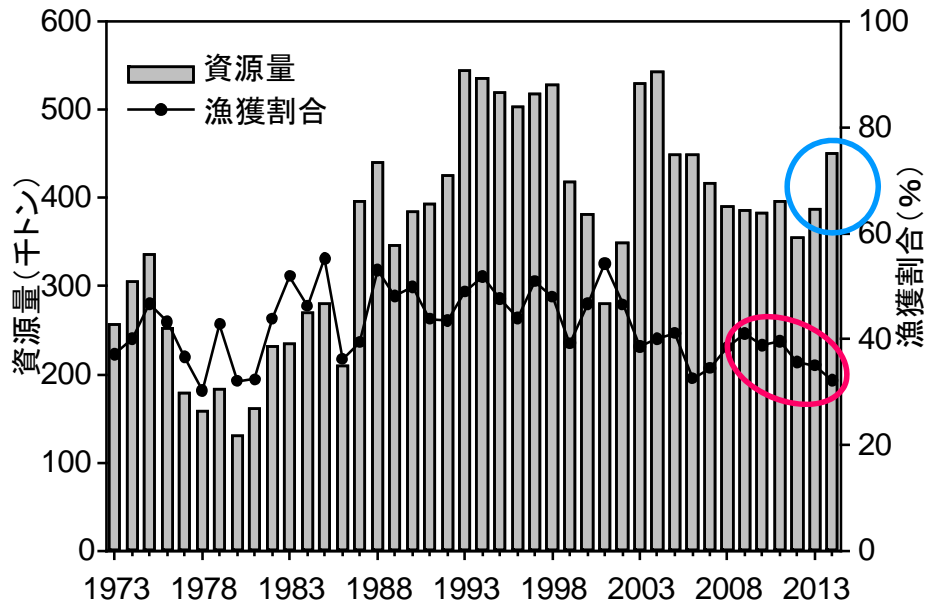


•2014年漁獲量: **145**千トン(うち日本による漁獲は121千トン)

資源評価の流れ



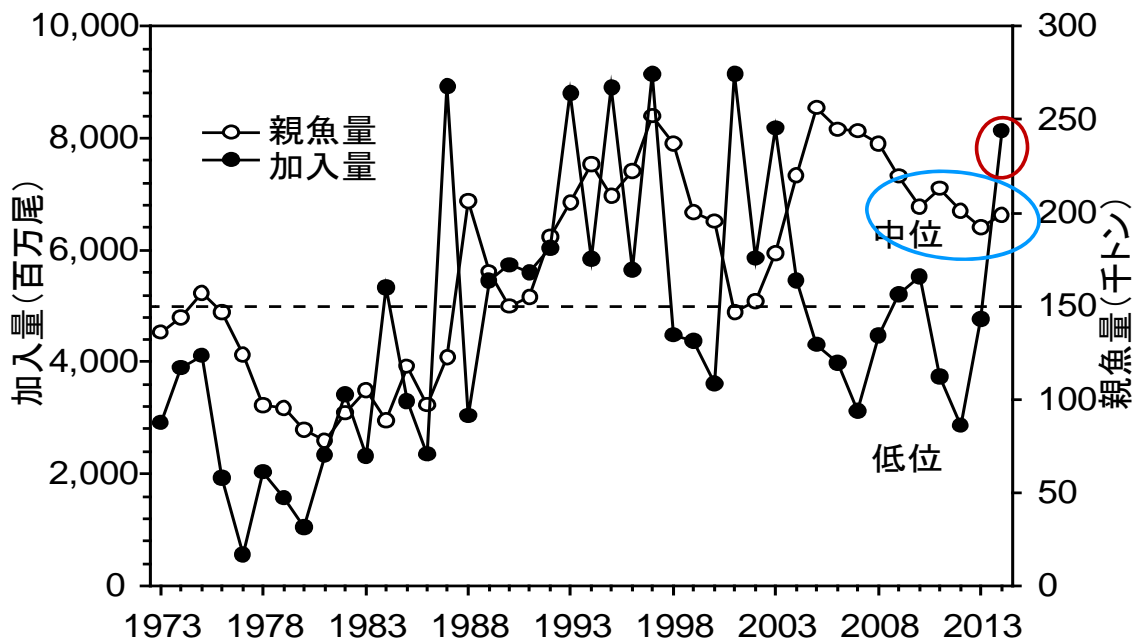
資源量と漁獲割合の推移



- 資源量は2001年から2004年にかけて増加した後、減少して2005年以降は同水準だったが、2014年は45万トンと上向いた。
- 漁獲割合は2009年以降、ゆるやかに減少し、2014年は約30%。

5

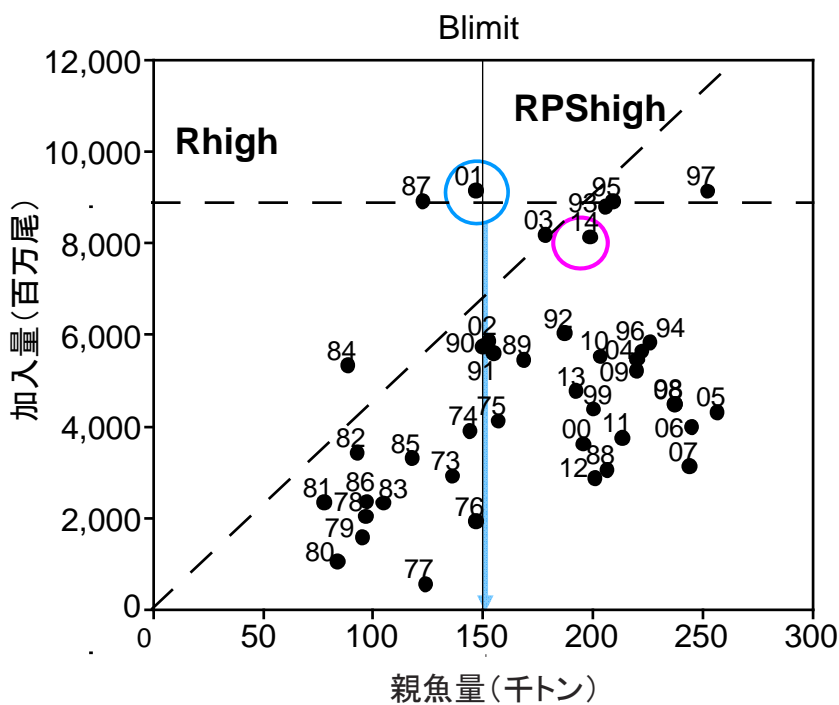
加入量と親魚量の推移



- 加入量は過去には80億尾を超えた年があったが、2005年以降は30~60億尾で推移。2014年加入量は80億尾と推定された。
- 親魚量は2009年以降20万トン前後で推移。2014年親魚量(20万トン)は、中位水準

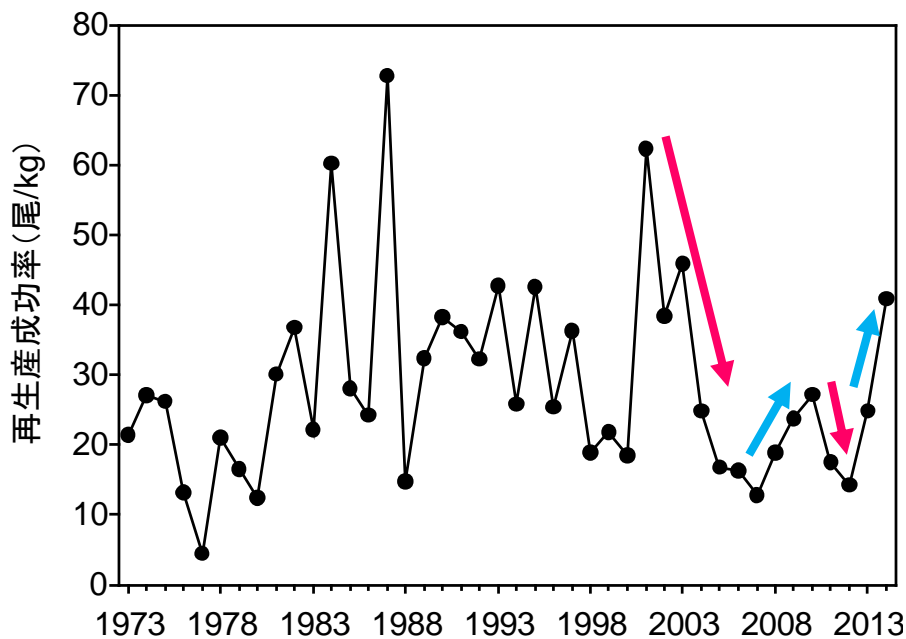
6

再生産関係とBlimitの設定



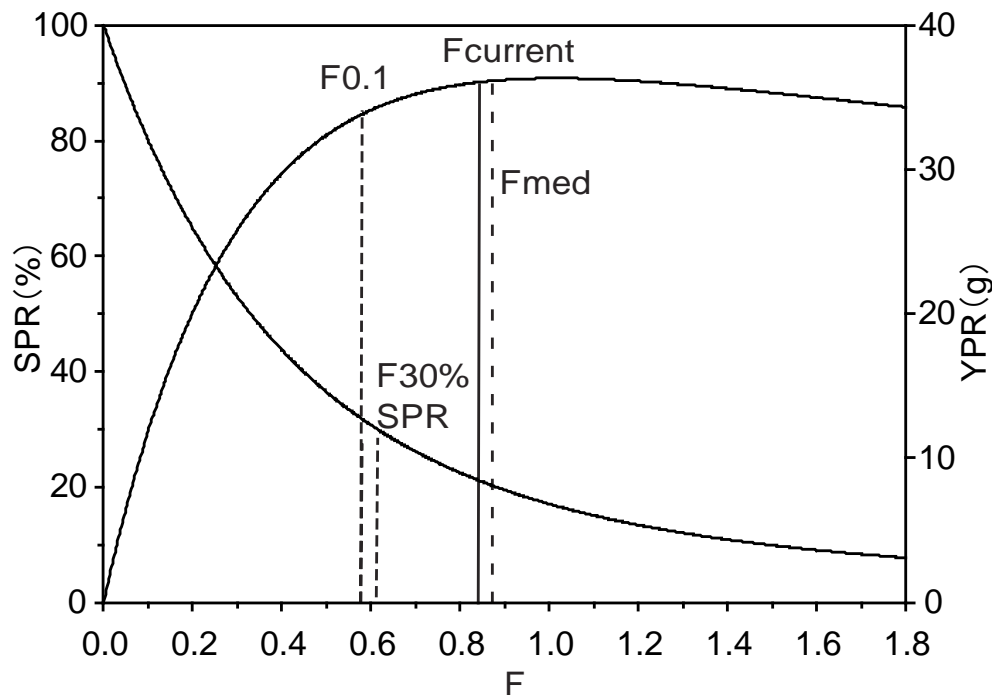
- 親魚量と加入量に正相関
- 親魚量が少ない場合には高い加入量が出現しない傾向
- Blimit は、高いPRS (RPShigh)が生じた時に高い加入量Rhighが期待できる2001年の親魚量水準(約15万トン)
- 2014年親魚量 > Blimit

再生産成功率RPSの推移



- 2001年に急増したのち、2002～2007年までは減少傾向だった。
- 2008年以降は増加傾向に転じ、2011,2012年は減少して2013年以降は再び増加した。

生物学的管理基準と現状の漁獲圧の関係



- ・ 現状のFはF30%SPR、F0.1よりも高い。

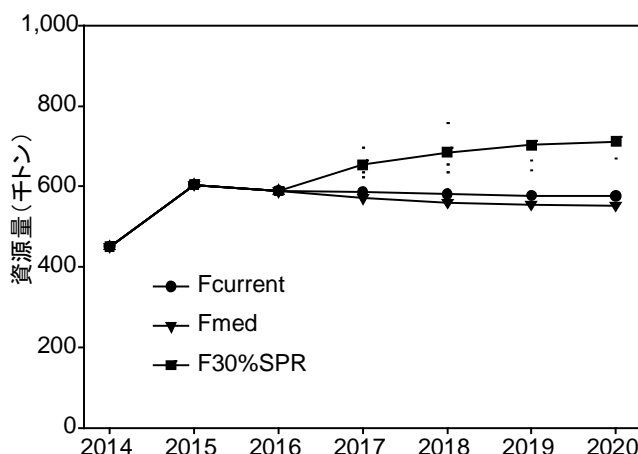
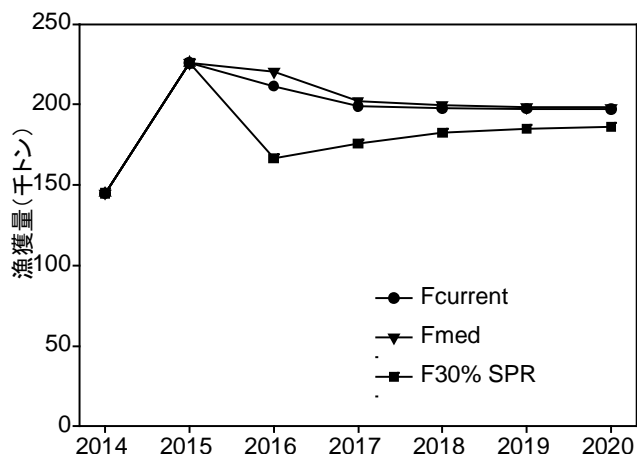
9

資源評価のまとめと2016年ABCの算定方法

- 資源評価のまとめ
 - 中位・横ばい (H26年度資源評価 中位・横ばい)
 - 2014年の親魚量 (20万トン) > Blimit (15万トン)
 - $F_{30\%SPR} < F_{current} < F_{med}$
- ABC算定方法
 - 規則 1-1)-(1)
 - $F_{2015} = F_{current} (2014年)$
 - 加入量 = RPS (2004~2013年の中央値) × 親魚量
- 管理基準
 - 親魚量の増大を図る $F_{30\%SPR}$
 - 現状の漁獲圧を維持する $F_{current}$
 - 親魚量を維持する F_{med}

10

各漁獲シナリオの将来予測



漁獲圧を現在のF (Fcurrent)より弱めると
2016年の漁獲量は低くなるが、その後、増加傾向に転じ、
資源量の増加率も高い。

11

2016年ABCの算定

漁獲シナリオ (管理基準)	Limit / Target	F値 (Fcurrent との比較)	漁獲 割合 (%)	将来漁獲量 (千トン)		確率評価(%)		2016年 ABC (千ト ン)
				5年後	5年 平均	2014年親 魚量を維 持 (5年後)	Blimitを 維持 (5年後)	
資源量の増大* (F30%SPR)	Limit	0.41(0.73 Fcurrent)	28	125~ 257	178	100	100	167
	Target	0.32(0.58 Fcurrent)	24	117~ 244	161	100	100	139
現状の漁獲圧 の維持* (Fcurrent)	Limit	0.56(1.00 Fcurrent)	36	105~ 261	193	83	96	211
	Target	0.45(0.80 Fcurrent)	30	127~ 255	184	99	100	179
親魚量の維持* (Fmed)	Limit	0.59(1.06 Fcurrent)	37	101~ 259	196	76	93	221
	Target	0.47(0.85 Fcurrent)	32	127~ 270	190	97	100	188

* を付した漁獲シナリオは中期的管理方針に合致する

12